

# TEAM. USED CARS(短編)

たかだや

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時系列は『シーズン2』の第6話と第7話の間です。第7話までのネタバレが含まれます。

戦闘シーンはありませんし、特に事件らしいことも起きません。

第8話以降の内容と矛盾する可能性は大いにあります。

T  
E  
A  
M.

U  
S  
E  
D

C  
A  
R  
S

目  
次

# TEAM USED CARS

「まさか、フクさんと対立することになるなんてねえ」

三崎一也はソファーに座り込むなり、声を漏らした。

軽い口調とは裏腹に、彼の表情には暗い影が差している。

三崎の他にこのクラブにいるのは、志藤真、高井望、水澤悠の3人だけだ。

「どうして……フクさんだって、ウチらと同じ気持ちのはずなのに……！」

望はどこか苦しそうに言うと、カウンター席に座り込み、顔を下に向けた。

誰も互いの顔を見ようとしないう。別に気を遣っている訳ではなかった。自分以外の人間がどんな顔をしているのか、目で見なくても痛いほどにわかるといっただけだ。

志藤は一人掛けのソファーに深く腰掛け、口を開いた。

「俺達とは状況が違うんだ。アイツにはまだ、守らなきゃならないものがある。そのために必要なのは、マモルや俺達との繋がりがりなんかじゃない。金だ<sup>カネ</sup>」

「でも、今のマモちゃんを止めるには、フクさんもないと……！」

三崎がそう言うと、今まで黙って立っていた悠が声を上げる。

「人間がアマゾン狩りを止めない限り、マモル君は止まらないかもしれない」

「無理だな。少なくとも俺にとって、マモル以外のアマゾンはムシでしかない」

志藤が悠の顔を見ないまま口を挟むと、悠も押し黙る。今度は、望が悠に顔を向けた。

「悠も言ってる。全部に同じ気持ちなんて持てないって」

「……うん。そうかもね」

再び重苦しい沈黙が店全体を包む。

その雰囲気になんか耐え兼ねたのか、三崎が悠に話しかけた。

「ていうか、坊っちゃんまは何でマモちゃん達と別れたの?」

「僕一人で行動してた時期があっただんです。新しい抑制剤を手に入れるために」

「そっか。あの腕輪の薬、二年間分しか入ってないんだっけ」

「覚醒したアマゾンには僕も助けてあげられない。でも、4Cに見つかったら殺される……独自のルートで抑制剤を手に入れる必要があっただんです。でも……!」

悠が言葉を詰まらせると、志藤は彼に目を向ける。

「でも……?」

「その間に、4Cがマモル君達を襲撃して、仲間のアマゾンの半分が犠牲になりました。それから僕らの関係がおかしくなって……」

悠はそう言うと、どこか虚ろな目で虚空を見つめる。無意識に、当時のマモルとの会話が頭に響いた。

『水澤君は誰を守ろうとしているの!?僕たちはチームの筈でしょ!何でいつもアマゾンじゃなくて、人間と一緒にいるんだよ!』

『でも、薬がないと皆は……』

『今すぐ覚醒するわけじゃない。岡村君も山本君も、水澤君と一緒にいれば……死ななかつたかもしれないのに……!』

『ごめん……!』

「最後には、皆僕の前から姿を消しました。多分、マモル君は僕のことを仲間だとは思っていないんです。だから、今のマモル君を止めることができる人がいるとしたら……志藤さん達だけです」

悠は少し笑いながら志藤たちに語り掛ける。声は微かに震えていた。

「やるしかないないか。マモルからオリジナルを没収する……先のこととはそれからだ」

志藤がそう言うと、望は椅子から降りて三崎が腰掛けるソファーマで歩いていく。

「じゃ、三崎さん、飯作ってよ」

「俺の片腕義手だよ?ホラッ」

三崎は大袈裟に義手を望に差し出して抗議する。

しかし、望は無言で三崎の義手を払いのけた。この二人の力関係は7年前に出会った頃から変わっていない。

「しようがねえだろ。それとも一也、俺や望の手調理食べたいか？」

志藤はどこか皮肉っぽい声で、三崎に声を掛けた。

「遠慮しときまーす」

「フンッ！」

三崎が即答すると同時に、望が彼の右肩にアームロックを決める。

「ちよつとーのんちゃん！ギブギブギブ!!」

悠は、じゃれ合う二人を見ながら少し微笑む。5年前に彼らと道を分かつ前に戻ったような気分だった。

「マモル君……」

悠は、ここにはいない仲間を思いを馳せながら、コートのポケットの入った『何か』を握りしめる。

志藤はそんな悠の様子を目の当たりにして、無意識に目を見開いた。

『それが何……？？それ、僕達を助けてくれる!?!』

志藤の目には、ここにはいない仲間の姿がはつきり見えた気がした。

「悠……」

志藤がそう言うと、悠も彼に目を向ける。

「守りたいものは守る、だったな……?？」

「はい。今でもそれが、僕の戦う線引きです」

志藤はその言葉だけを聞くと、そつと悠から目を逸らした。